



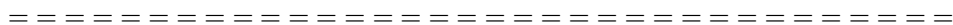
地域日本語支援ニュース こだま 第 315 号

2017.3.23



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



■ともに生きる

ようこそ 私たちの町へ

本多 誠

皆さんは、日本に暮らす難民を身近に感じたことがありますか。彼らが、どこで、どんなふうに、どんな思いを抱いて生活しているのか、見たり、聞いたりしたことがありますか。都内に、日本に定住を希望する難民（※1）に対して、日本語教育その他の定住支援を行う、RHQ支援センター（※2）という施設があります。このセンターで学んでいる難民たちとの交流を長年続けている地元町会の方々がいます。年々、交流に関わる方々の人数も徐々に増え、難民たちを温かい目で見守ってくれています。「皆さんのことを、お客さんだとは思っていません。同じ町に住むお仲間だと思っています」町会長の本多誠さんが、センターの開講式で、いつも難民たちに語りかけることばです。半年後、1年後の修了式では、新天地に旅立つ難民たちに、熱いエールを送ってくれます。地域の人々と難民とが手をつなぐまでの経緯と、彼らへのメッセージを、本多会長からいただきました。

私たちの町会とRHQ支援センターとは、長年のお付き合いがあります。その発端は、町会の婦人部長の白子さんが、ある会合で当時の区長から「RHQ」ということばを聞いたことから始まります。白子さんは、当然そのことばの意

味がわからず質問したところ、「日本に定住する難民の方々が学んでいる施設ですよ」との説明がありました。その後、私たちの手元に、同センターについての資料のパンフレットが届きました。白子さんは、「何かのご縁で町内に開設されているセンターで、難民の皆さんが熱心に勉強しているのだから、何かお手伝いできないだろうか」という意見でした。

これをきっかけに、私たちの交流が始まりました。盆踊りや餅つきなどの町内の行事に招待したり、昔遊びの会や七夕交流会を企画したりしました。センターのコースが修了する時には、学習発表会に招かれて、一日でも早く日本語を習得したいとがんばっている難民の皆さんの姿に感動させられたことを思い出します。

これからも、この町に来る難民の方々を仲間として、ともに安全安心な街を作ることに汗を流していけることを期待しています。

編集部注

※1 難民： 難民条約（難民の地位に関する条約 1951）では、難民を「人種、宗教、国籍もしくは特定の社会的集団の構成員であること又は政治的意見を理由に迫害を受けるという十分に理由のある恐怖のために、国籍国の外にいる者であって、その国籍国の保護を受けられない者又は受けることを望まない者及び常居所を有していた国の外にいる無国籍者であって、その国に帰ることを望まない者」としています。

現在日本には、難民条約に基づく難民として政府が認定した条約難民、1975年のベトナム戦争終結後、インドシナ三国で発生した政変に伴い祖国から逃れてきたインドシナ難民、さらには 2010 年から日本政府が受入れを開始した第三国定住ミャンマー難民が定住しています。第三国定住とは、難民キャンプ等で一時的な庇護を受けた難民を、当初庇護を求めた国から新たに受入れに合意した第三国へ移動させることをいいます。難民は移動先の第三国において庇護あるいはその他の長期的な滞在権利を与えられることになります。

RHQ支援センターでは、現在条約難民と第三国定住難民が、昼間半年間、もしくは夜間一年間にわたり、日本で自立して生活していくための教育を受けています。

※2 RHQ支援センター：（公財）アジア福祉教育財団難民事業本部
RHQ支援センター

<https://www.rhq.gr.jp/>
